



Wiener Ring-Ensemble

ウィーン・リング・アンサンブル

ウィーンの新春の香りをそのままに

ウィーン・リング・アンサンブルがさいたまにやって来る。
ウィーン・フィルの中心的なメンバー9人による小編成アンサンブルながら、
ウィーンならではの音楽 ～ワルツにポルカにオペレッタを、
本場ならではの表情と共に、楽しく届けてくれるのだ。

文=片桐卓也 (音楽ライター)

新年恒例の音楽イベントと言えば、全世界に中継されるウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートにとどめを刺す。その恒例行事に参加したばかりのウィーン・フィルのメンバー9人がそのまま日本にやって来る。まさにウィーンの新春の香りをそのまま届けてくれる演奏会だ。

ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートと言えば、ウィーンゆかりのヨハン・シュトラウスなどの音楽がメイン。これは1939年に往年の名指揮者クレメンス・クラウスが創始したもの。1955年からはボスコフスキーがずっと指揮をしていたが、カラヤンやクライバーなど、スター指揮者が次々と指揮台にあがることになって、世界的な注目を集めるようになった。特に、小澤征爾が指揮した時に、日本でCDが大ヒットしたのは記憶に新しいところだ。もともとウィーン市民を慰まし、励ますための特別音楽会だったから、演奏されるのはウィーンで活躍した作曲家、特に19世紀に大流行したウィンナ・ワルツなどがレパートリーとなっている。

ウィーン・リング・アンサンブルは、そのウィーン・フィルのメンバー9人が作る小さな編成のアンサンブルだが、いかにもウィーンの街中で楽しめるような雰囲気を持っている。2008年のプログラムもいかにウィーンならではの。レハールの《メリー・ウィド

ウ・メドレー》やニコライの《ウィンザーの陽気な女房たち》序曲など、オペレッタの名作からシュトラウス親子のワルツ、ポルカなど盛りだくさん。こうしたウィーンの音楽の魅力は、ダンス用で軽快なものが多いということ。うきうきした気分は、まさに日本のお正月にもふさわしい。作品の由緒来歴を知らなくても、気軽に楽しめるところが、このコンサートの良いところ。ぜひウィーンの新春気分を日本でも味わおう。

profile ウィーン・リング・アンサンブル

ウィーンの新市街を取り巻くような環状道路、「リング」にちなんで命名されたこのアンサンブルは、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の名コンサートマスター、ライナー・キュッヒルを中心として、ヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、フルート、ホルン各1とクラリネット2の9人編成。全員ウィーン・フィルの腕利き主要メンバーであり、彼らのウィーン情緒の薫り高い音楽は聴衆をこの上ない幸福感で満たしている。

●●●● MUSIC ●●●●

埼玉会館ニューイヤー・コンサート

ウィーン・リング・アンサンブル

【日時】2008年1月5日(土) 開演 14:00

【会場】埼玉会館 大ホール

【曲目】ニコライ:歌劇《ウィンザーの陽気な女房たち》序曲
ヨーゼフ・シュトラウス:天体の音楽 J. シュトラウスII:ポルカ《狩》
レハール:《メリー・ウィドウ》メドレー ほか

【チケット(税込)】好評発売中

一般:S席5,000円/A席4,000円/B席3,000円/学生B席1,500円
メンバーズ:S席4,500円/A席3,600円/B席2,700円

深く温かな響きに充ちる 時間のなかに

文=青澤隆明 (音楽評論)

クラシック音楽が教えてくれることはいろいろあるけれど、じっくりと時間をかけて自分自身や世界と向き合うことの大切さはそのひとつだ。文学であれ演劇であれ、古典の名がつく営みすべてがくり返し告げてきたのは、人生はよく生きるに値するものであるし、人間存在の抱く問題は時代を超えても解決されることがない、という真実だろう。

清水直子のヴィオラが、不器用なまでの真率さで向き合いながら聴く者に語りかけるのは、そうした音楽と人間の想像力への深い信頼なのかも知れない。自然な流れでヴィオラという楽器に出会い、そうしてともに歩み続けてきたのは、この楽器のもつ温かい音色や音の深さが、彼女の内心と強く共鳴したからだろう。

何をするにしても、たとえばひとつひとつの家事をしているときも、ゆっくりと時間をかけて、とにかくいいに行いたい。清水直子はいつもそんなふう語る。彼女が慎重に言葉を選びながら話すのは、できるかぎり誤解なく精確に伝えたいと努めるからだ。そうした姿勢は、会話だけでなく、もちろん音楽表現を含めて、清水直子のライフのあらゆる場面で変わらないのだと思う。音楽家の日常生活など知る由もないが、彼女の演奏の真摯な温かみと誠実さは、そうしたゆったりとした歩みのなかから確実に立ち上がってくるものなのだろう。

オーケストラや室内楽のなかでは旋律だけではなく、ハーモニーの微妙な色彩や変化を支えるヴィオラという楽器の魅力は、多様な深みをもっている。ベルリン・フィルの首席ヴィオリストという彼女の職業が、多岐にわたる作品を手がける多忙な仕事であることは疑いない。しかし、だからこそ、そのなかでも清水直子が自分のペースをきちんと守りながら、彼女自身の音楽を深く温めていることは重要だ。彼女が夫君でもあるピアニストのオズガー・アイディンとライフ・ワークのように続けているデュオは、清水直子という人間の日々の充実を、最良の親密さをもって物語る心豊かな音楽の時間であるに違いない。

NAOKO SHIMIZU

女性初のベルリン・フィル首席ヴィオリスト、その緻密にして豊潤なる響きに包まれる幸福

●●●● MUSIC ●●●● 清水直子 ヴィオラ・リサイタル

【日時】2008年2月2日(土) 開演 14:00 【会場】彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

【出演】オズガー・アイディン (ピアノ)

【曲目】シューマン:おとぎの絵本 Op.113 ヒンデミット:ヴィオラとピアノのためのソナタ Op.25-4
フランク:ヴィオラ・ソナタ イ長調 (原曲=ヴァイオリン・ソナタ)

【チケット(税込)】好評発売中 一般:S席4,000円/A席3,000円/学生A席1,000円 メンバーズ:S席3,600円/A席2,700円

profile 清水直子 (しみず なおこ)

桐朋学園大学でヴァイオリンを広瀬悦子、江藤俊哉の各氏に、ヴィオラを岡田伸夫氏に師事。ヴィオラに転科し1993年研究科修了。94年よりデトモルト音楽大学で今井信子氏に師事。97年ミュンヘン国際音楽コンクール・ヴィオラ部門にて、バシュメット以来21年ぶりの第1位を受賞。2001年2月よりベルリン・フィルハーモニー管弦楽団首席ヴィオラ奏者。その活躍ぶりは06年1月、毎日放送『情熱大陸』で取り上げられた。